んころもちの島で

柴田亮子

読売新聞社

かんころもちの島で　定価　九八〇円

著　者――柴田亮子　野上照代
　　中野妙子

編集人――佐野　寧
発行人――堀内　稔
発行所――読売新聞社
　　東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
　　大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
　　北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――ナショナル製本
第一刷――昭和五十九年十一月十八日

ISBN 4-643-73870-7 C 0095
© 1984, Yomiuri Shimbun-sha.
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

第五回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウ スペシャル入賞作品集「かんころもちの島で」

目次

優秀賞　かんころもちの島で　柴田亮子　5
優秀賞　父へのレクイエム　野上照代　77
入賞　虹の臍帯　中野妙子　141
選考経過　209
受賞その後　江川晴　212

装丁　重原保男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かんころもちの島で

第五回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウ スペシャル
入賞作品集

優秀賞

かんころもちの島で

柴田亮子（しばた りょうこ）

しばた　りょうこ

昭和十一年十月六日、熊本県生まれ。福岡女子大学英文科中退。東京タワー出版社、鶴書房を経て、昭和四十九年婦人生活社に入社。現在『婦人生活』編集部次長。親子問題、食生活、医学、健康などの分野を担当。

現住所　千葉県松戸市横須賀二五三の二
新松戸ファミールハイツ五の九〇九

校長室で

校長室の南むきの窓からは、山に囲まれた狭苦しい愛の浦の港の全景が見渡せる。

ちょうど十時発の福江行きの連絡船が波止場を離れるところで、エンジンの唸りがひときわ高まったと思うと、一瞬間をおいて、ブォーッという汽笛が響いてきた。

「いや、無理なことをお願いしているのは判っているんです。しかし、私はやはりあなたが最適任だと思います」

石油ストーブに点火して戻ってきた校長は、再び説得を続ける。

「あなたは経験が少ないからといって断られるが、この仕事に関しては、経験もなにもない。この中学の十五人の教員の中で、特殊学級を担当した経験のあるものは一人もいないんです。この中学でも、はじめての特殊学級なんですからね。だから、経験という点では、誰も全く同じ条件なんです」

煙草に火をつけるために、校長が口を閉ざすと、音楽教室から流れてくる『仰げば尊し』の合唱が、グッと近づいてくる感じがする。

卒業式やさよなら会の準備が、もう先週からはじまっているのだ。

「現に、私自身、特殊学級についてほとんど勉強していません。ただ、特殊学級というのは、仕組みからみても普通学級とは全く違う。新設される学級は、一年から三年までそれぞれ二名の計六名、これをひとりの教員が担当することになります。みんな知恵遅れの子どもですし、生活や行動の面でも問題のある子が多い。それをひとつのクラスにまとめて指導していくのは大変なことだと思います。これには、恐らく普通学級のやり方は通用しない。全身でぶっつかっていく情熱だけが決め手でしょう。……いや、待てよ、情熱だけではなく、体力も必要でしょうがね」

「校長先生、私も、この二日間、ずっと考えてみたのですが、やはりお引き受けする自信がありません。それは、私は体力だけは自信がありますが、しかし、体力だけではとてもつとまらないような気がします」

「いや、あなたは若いし、情熱もある。私は、この一年間、あなたを見守ってきたので、よく判っているつもりです。それに、私は教育委員会の書類を見て、あなたが自分から僻地校を志望されたことも知っています。この波留島にくる前は、対馬の中学で三年間でしたね」

「はい」

「どうでしょう。一年間だけでもやってもらえませんか。実は、これはここだけの話にしてもらいたいんですが、来年度から特殊学級に編入されることになる一年生二人、二年生二人に、私が直接逢って訊いてみたのです。担任の先生に誰を希望するかってね」

「はあ?」

「四人のうち二人は、特殊学級に編入されることを怒っていて、返事もしませんでしたが、一年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の川中君子と二年の宿輪秋子は、ふたりとも西原先生がいいって言うんです」
「ええっ、ほんとですか」
この一年間、私は川中君子や宿輪秋子のクラスに英語を教えてきた。しかし、このふたりとは個人的に話したこともないし、クラブ活動などでも関わりをもったことがない。
「いや、生徒はよく見ているんですよ。誰が自分に一番必要な先生かということをね。恐ろしいくらいですよ」
「そうですか。ふたりがそんなことを言ったんですか」
校長の説得でグラついてくる気持ちに、トドメを刺されたような気分である。
「いいですね。とにかく一年間、一年間だけやってみてください。ずっとやってくれなんて言いませんよ」
「はあ。……それでは、一年間だけお引き受けしてみましょうか。でも、本当に自信はないんですけど」
「いや、大丈夫、大丈夫。よかったな。これで決まりだ」
校長は椅子からとびあがると、大慌てで教頭と教務主任を探しに走り出して行った。
風が出てきたらしく、沖では大きな白波が弾け散っている。九州の最西端の五島列島といえども、二月の風はまだ肌を刺すように冷たいのである。

先生好いちょる

教室の扉に手をかけようとすると、中から、ガタン、ガチャガチャと、もの凄い音が響いてきた。

眼鏡をかけた肥った女の子が、椅子をふりまわして荒れ狂っている。三年生の有川和歌子だ。机や椅子が倒れ、床の上にはガラスの花瓶が粉々に砕け散っている。

「どうしたの、有川さん。落ち着きなさい」

と声をかけると、手にした椅子をほうり出し、恐ろしい形相で私のほうに詰め寄ってきた。

「先生、なして特殊学級ば作ったつか。みんなが、おっだのことを馬鹿、馬鹿言うとっぞ。西原学級は馬鹿学級と言うとるっぞ」

「普通学級に戻してくれれ」

横から泣きだしそうな蒼い顔で訴えるのは、二年生の波山安夫である。

「今朝、廊下ば歩きよったら、おるがどがんもせんとに、2Bの青木がおるの金玉のところば蹴ったつぞ。うな、どうしてそがんこつするかと言うたら、西原学級、馬鹿学級とおらんで逃げて行きよった。先生、普通学級に戻してくれれ」

「そう、そんなことを言う人間がいるの。人のことを馬鹿馬鹿という人間が、本当の馬鹿なんですよ。よし、2Bの青木は、あとで先生がとっちめてやります」

「普通学級に戻してくれれ、先生」
「それは、あとでよく相談しましょう。その前に、みんなで机や椅子を起こして掃除しましょう。これじゃあ危いからね」
オルガンの横に眉をひそめて立っていた宿輪秋子が、スッとほうきを取ってきて、黙って床のガラス片を掃き集めはじめた。
釣られるように、ほかの生徒も机を起こしたり、椅子を運んだりしはじめたが、有川和歌子はベランダにとび出し、こちらにセーラー服の背をむけて、岩のように動かない。
机を縦に二列に並べ、前から、一年の城島福市と橋口金子、二年の波山安夫と川中君子、三年の有川和歌子と宿輪秋子の順で席割りをする。
みんな動作が鈍く、言われたことがすぐ呑みこめないので、普通学級のようにスムーズにことが運ばず、面くらってしまう。
二十分もかかって、一応みんなを自分の席に着かせたが、有川和歌子は頑なに背をむけたままベランダの柵にもたれ、教室に入ってこようとしない。
どうにも仕方がないので、気が落ち着くのを待つことにする。
「みなさん、静かに聞いてください。私が、これから一年間、みなさんのクラスを担当する西原享子です。私は去年の四月にこの学校にきて、これまで英語を教えていましたから、二年生以上の人は、私のことを知っていると思います。ただし、一年の城島福市君と橋口金子さんは、今日からこの中学校に進学してきたので、私の顔ははじめてですね。よく見て覚えておいて下さい」

城島福市は椅子に横ずわりして、学生服の袖のほころびに手を入れて、しきりにかきまわしている。橋口金子は口を半開きにし、放心したような表情だ。
波山安夫はふてくされたように両手で頬杖をつき、川中君子は眉を寄せ、固い表情で坐わっている。
有川和歌子は広い背中をみせて動かない。その背中は、怒りと悲しみを雄弁にものがたっている。
ただひとつの救いが宿輪秋子の存在だ。どこか微笑のようなものが感じられる柔和な表情で、私の口許をじっと見守っている。
「今日は、これから講堂で始業式がありますが、私たちは西原学級として出席します。一年から順に列をつくって入ってください」
「先生、おら絶対出んぞ！」
と安夫が宣言する。
説得する時間もないので、結局、福市、金子、君子、秋子の四人だけで列席することになる。
並んで講堂の入り口のところまで来ると、むこうから普通学級の生徒の列がやって来た。
すると、秋子を除いた三人は、怯えたような恥じるような奇妙な表情を浮かべて、立ちすくんでしまう。
「先生、先に立ってくれれ」
というので、私が先導して講堂に入る。

始業式がはじまった。
床に眼をおとして校長の挨拶を聴いていて、なに気なく顔を上げると、パッタリと福市の視線と出会った。
口をパクパクさせ、声を出さないようにして、なにか私に話しかけている。判らないので、首を傾げると、もう一度、パクパク……。
「先生、しょんべんまりに行ってよかか」
うなずいてやると、安心したように列を離れ、静かに外に出て行った。
日直をすませ、静まり返った校庭を横切って家へ向かう。かつて経験したことのない濃縮された疲労感が、全身を包みこんでいる。
たった一日でこれでは、このあと、いったいどうなるのだろうと、暗澹とした気持ちだ。
校門を出ると、大きな蘇鉄の植込みの陰から、赤い花柄の鞄を提げた橋口金子がヒョロリと姿を現した。
「あら、金子さん。まだこんなところにいたの。早く帰らなきゃあ」
金子は空いているほうの手をのばして、私の腕を掴む。
「あんな、先生」
「なに、なにか用事？」
「あんな、好いちょるよ。先生ば好いちょるよ」
え、と聞き返す間もなく、金子は肩をゆすって、小走りに駈け去って行く。

そうか。それを言いたいために、金子は二時間も私の帰りを待っていたのか。
胸の中に電灯でも点ったような気分になる。
野焼きの煙のただよう坂道を降りて行くと、港の対岸の丘の上に、黄色い月が光を増しはじめているのが見えた。

水汲み機械

おはよーございまーす。
始業の挨拶をすませて腰をおろした城島福市の顔を見ると、頬から顎にかけて機械油のようなものがベットリとこびりついている。
隣の橋口金子は髪をとかしていないらしくボサボサ頭で、セーラー服のネクタイが縄のようにヨレヨレだ。
「みんな、今朝起きて、ちゃんと顔を洗いましたか。洗わなかった人は手をあげてごらん」
と言うと、福市と金子、波山安夫の三人がパラパラと手をあげた。
「毎日顔を洗うように、あんなに言っているでしょう。どうして洗わないんですか。洗わない理由があるのですか。安夫君、言ってごらん」
「知らん。忘れた」
「呆れたねえ。金子さんは？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com